

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370362

研究課題名(和文) 19世紀フランスの文化事象としてのブルターニュの民謡収集

研究課題名(英文) The collection of folk songs in Brittany as a cultural subject of France in the 19th century

研究代表者

梁川 英俊 (YANAGAWA, HIDETOSHI)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：20210289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀のフランスにおいて、他の地域に先駆けて民謡収集が盛んになったのはブルターニュ地方であった。本研究はこの現象を、ロマン主義作家たちの民謡に対する関心や、中世趣味の流行を背景に復活した円卓物語の起源に関する議論等に焦点を当てながら、同時代のフランスやヨーロッパの歴史的・文化的状況の中で検討した。その結果、ブルターニュの民謡収集の成功は、19世紀にフランスが国策として行った全国的な民謡調査を推進する上で大きな契機のひとつとなったことを確認できた。

研究成果の概要(英文)：The collection of folk songs in France first started in Brittany in the 19th century. I examined this phenomenon from the historical context and the cultural situation of France and Europe as a whole by focusing on the interest of romantic writers in folk songs and the dispute over the origin of the tales of the Round Table which at the time had seen a revival with the wave of medievalism. I ascertain that the success of collecting folk songs in Brittany encouraged the French Government to launch an official investigation throughout France for a general compilation of popular poetry.

研究分野：人文学

キーワード：ブルターニュ ラ・ヴィルマルケ 円卓物語 アーサー王 ロマン主義 民謡 口承文化 『バルザス=ブレイス』

1. 研究開始当初の背景

フランス北西部の半島地帯に位置するブルターニュ地方は、古来ブルトン語(ブレイス語)というフランス語とはまったく異なるケルト系の言語を持ち、今日のフランスでも際立って地域的アイデンティティの自覚が強い地域として知られている。しかしそのアイデンティティの起源は比較的新しく、19世紀にはじめて現れたと言ってよい。報告者は90年代よりその起源に関する研究を進め、毎年のようにこの地方に赴いて文献調査やフィールドワークを行い、主に以下の3点にわたって研究成果を発表してきた。

19世紀のブルターニュ出身の著述家ラ・ヴィルマルケが1839年に出版した歌集『バルザス=ブレイス』がブルターニュのナショナリズムの形成において果たした役割を検証する研究。

主としてラ・ヴィルマルケとリュゼールが当事者となった「バルザス=ブレイス論争」を中心に、ブルターニュのアイデンティティの複数性の問題を民謡収集という観点から解明する研究。

上記の研究によって明らかになったブルターニュの地域的アイデンティティの形成過程を、わが国における類似の事例、特に鹿児島県奄美大島のそれと比較し、シマウタ(島唄)やシマグチ(島口)の保存による地域活性化の可能性を考察する研究。

以上の研究のうち、特に に関しては、従来の研究が、主としてブルトン人研究者によって進められてきたこともあり、視点がブルターニュに偏りがちであった。本研究はこのブルターニュの民謡収集を、19世紀フランスの文化事象として捉え直し、フランスおよびヨーロッパ全体の歴史的・文化的・思想的動向との関連の中で再検討することを目的としている。

2. 研究の目的

フランスの民謡集は、1839年に出版されたラ・ヴィルマルケの『バルザス=ブレイス』(ブルトン語で「ブルターニュの民謡」の意)をもって嚆矢とする。この歌集はブルターニュが優れた民謡を持つことを国内外に知らしめ、ブルターニュにおける民謡採集ブームの火付け役となった。しかしブルターニュにおける民謡採集は、実際にはこの書物の出版以前から始まっていた。これらの採集の目的や、ラ・ヴィルマルケの歌集が出版された時代的背景を明らかにするために、本研究ではフランスやヨーロッパの歴史的・文化的状況から以下の3点について調査を行う。

ヨーロッパ諸国の民謡収集やロマン主義作家たちの民謡に対する関心が、ブルターニュの収集家に与えた影響を明らかにする。
18世紀末から19世紀にかけて行われた

円卓物語の起源に関する議論とアーサー王物語関連の書物の出版が、ブルターニュの収集家に及ぼした影響を明らかにする。

19世紀に国策としてフランス全土で行われた民謡調査とブルターニュの民謡収集との間の相互関連性を明らかにする。

上記の各点について、具体的な研究内容は以下の通りである。

については、18世紀末以来ヨーロッパ各地で行われるようになった民謡採集を概観し、それがどのようにフランスに紹介されたかを文献を通じて明らかにする。またフランスのロマン主義作家たちが民謡に対して抱いた関心を、その方法や動機とともに調査し、各作家の民謡観を比較することによって、ラ・ヴィルマルケの歌集の時代的背景を美学的な観点から解明する。

に関しては、ラ・ヴィルマルケの収集に大きな影響を与えた円卓物語の源泉がブルターニュやウェールズにあるという、当時盛んに行われていた議論の背景を再検討する。またロマン主義とともに再発見され、18世紀末から19世紀にかけて関連する物語が出版されて流行を見たアーサー王物語について、当時フランスで出版された関連図書をリストアップして文献目録を作成し、作品の具体的な受容様態にも注目しながら、そのブルターニュへの影響を明らかにする。

については、19世紀にフランスで行われた国策としての民謡調査に関する研究がテーマとなる。第二共和制下には公教育大臣サルヴァンディーの主導で民謡調査が奨励されたが、第二帝政下ではルイ・ナポレオンの命令で、公教育大臣フォルトゥールが中心となってフランス全土で調査が行われた。ラ・ヴィルマルケの歌集の成功はこれらの民謡調査にいかなる影響を与えたのか、あるいはこれらの調査はリュゼールをはじめとするラ・ヴィルマルケ以後のブルターニュの収集家にとってどのような意味をもったのかという問題について、特にラ・ヴィルマルケとリュゼールの民謡観の対立に着目しながら、明らかにしてみたい。

3. 研究の方法

本研究は3年間の研究期間において、以下の方法で研究を進めた。

日本における関連文献の調査・収集および読解。

パリの国立図書館をはじめとするフランスの図書館等における関連資料の調査・収集および読解。

以上のように本研究において中心となるのは、日仏における文献調査である。まず初年度の平成25年には、18世紀後半から19世紀にかけて出版されたヨーロッパの民謡集

をリストアップし、仏語訳のあるものについては、そのフランスへの影響についても調査した。特に 18 世紀にヨーロッパを席卷したマクファーソンの『オシアン』のフランス文化全般への影響を考える。またヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの『民謡集』についても、そのフランスへの受容という問題を中心に検討する。時間があれば、エクスタン男爵、ことフェルディナン・エクスタンについても調査の対象とした。彼が中心となって編集した雑誌『カトリック』は、「ラーマヤナー」や「マハーバーラタ」、「ニーベルンゲンの歌」などの世界各地の神話や民話の紹介で知られており、その具体的な内容を検討することは当時の知的潮流を理解する上で重要である。

円卓物語の起源に関する議論については、まずその歴史的な過程を具体的に辿り、ケルト起源説が登場する時期や根拠を検討する。特にラ・ヴィルマルケにも大きな影響を与えたラリュ神父の著作『中世におけるアルモリカのバルドの作品に関する研究』(1815 年)の受容について調査する。一方、その議論の基盤となったと思われる 18 世紀末からのアーサー王物語の流行に関する研究は、フランスでもきわめて乏しい。したがって、研究のための基礎的作業として、まずこの時期に出版されたフランス語のアーサー王物語関連文献の目録の作成を目指し、その後ラ・ヴィルマルケをはじめとするブルターニュの収集家が参照し得たであろう文献の確定を試みる。

いまひとつの研究対象は、19 世紀に行われた国策としての民謡調査である。1834 年の公教育大臣ギゾーの提唱により散逸の恐れがあるすべての文書の文字化が奨励され、民謡もその対象となった。1845 年には公教育大臣サルヴァンディーが「フランス各地域の民謡収集に関する法令」を發布し、「宗教的・歴史的詩歌委員会」が組織されて、民謡の収集が呼びかけられた。その後、ルイ・ナポレオンの命令で 1852 年に民謡収集が提唱され、公教育大臣フォルトゥールが中心となって、全国各地の民謡を『フランス民衆詩歌集成』なる書物にまとめ上げる計画がスタートする。

歴代の公教育大臣によるこれらの法令は、いわば民謡収集の国家によるお墨付きを意味していたが、この方向性を決定する上で『バルザス=ブレイス』の影響は小さくなかったはずである。この歌集を中心としたブルターニュからパリへの逆の影響はいかなるものだったのかを検討してみたい。

4. 研究成果

平成 25 年度は、まず研究全体を進める上で必要不可欠な基本文献の収集に力を入れた。その上で、特にヨーロッパのロマン主義関係の文献について読解・分析を進め、この

時代の「民衆」の概念を理解すべく努めた。さらに、19 世紀に実施された二つの民謡調査、すなわちサルヴァンディー調査とフォルトゥール調査に関する文献を調べ、特に後者についてその詳細を知るべく、パリのフランス国立図書館に所蔵されている同調査の草稿資料を検討したほか、この調査をきっかけにフランスで出版された民謡集や関連文献をリストアップした。

またフォルトゥール調査の核となった歴史研究委員会の議事録を参照し、そこで議論された事柄や、同委員会に委員として参加したラ・ヴィルマルケの役割を分析した。

ブルターニュにおいては、レンヌ中央図書館、レンヌ大学図書館等でも同様の文献調査を行ったほか、歌手・民謡研究家のヤン・ファンシュ・ケメネール氏、および彼の在籍する音楽グループ「バルザス」のメンバーから、ブルターニュ民謡の歴史と現状に関する有益な示唆を得た。またレンヌ第 2 大学ブルトン語科教授のエルヴェ・アルビーアン氏には、ブルトン語教育における民謡の使用に関して有益な情報を得た。さらにレンヌ第 2 大学教授のイヴ・ドフランス氏からは、文献調査全体に関わる助言を受けた。

平成 26 年度は、当初の計画では前年度の研究成果を論文にまとめる予定であったが、研究目的のひとつであった「円卓物語」の起源に関する議論を検討する過程で、『バルザス=ブレイス』の冒頭の歌である「グウェンフランの予言」にこの問題を解く鍵があることを発見し、その調査研究と成果発表を最優先することにした。そのため、9 月に予定していた海外調査を中止し、多くの時間を英、仏、ブルトン語の文献の収集・調査・読解に費やすことになった。

結果として、ラ・ヴィルマルケがグウェンフランに関して参照した文献をほぼすべて突き止め得たほか、18 世紀におけるアーサー物語の復活を促した、中世趣味や「トルバドゥールもの」の流行についてもその詳細が明らかになり、『バルザス=ブレイス』の成立の背景に関する理解をこれまで以上に深めることができた。なお、この研究成果に関しては、その一部を 10 月に行われた日本ケルト学会の研究大会において発表した。

平成 27 年度も、前年に引き続き「円卓物語」のフランスにおけるリバイバルに関する研究を進め、鹿児島大学の紀要に 2 本の論文を発表したが、この年はちょうどラ・ヴィルマルケの生誕 200 年に当たっており、それを記念して日本ケルト学会東京研究会および九州研究会でラ・ヴィルマルケに関する連続講演を行った。

またラ・ヴィルマルケの故郷カンペルレでは、ブルターニュ・オクシダントル大学が中心となって、11 月 12 日～13 日に生誕 200 年を記念する国際シンポジウム『「バルザス=ブレイス」を越えて』が開催されたので、それに参加してラ・ヴィルマルケ研究の最新の成

果に触れるとともに、ブルターニュの研究者たちと議論する機会を得た。

加えて、この年には予期しなかった方向への研究の発展があった。それは本研究テーマがラフカディオ・ハーン研究と結びついたことである。きっかけは、平成 27 年 5 月に学会で訪れた富山大学の附属図書館で、ラフカディオ・ハーンの蔵書を収めたヘルン文庫を閲覧し、そこで『バルザス=ブレイス』をはじめとするブルターニュの口承文化関係の書籍を発見したことにあるが、この発見はブルターニュの民俗学的世界的な伝播という観点から、きわめて豊かな研究の鉱脈を予想させるものであったので、10 月に再度ヘルン文庫において調査を行い、書簡集等の読解を通じて、ハーンの口承文化への関心の原点には、ブルターニュの民俗学を含むフランス民俗学があるという事実を確認することができた。

ハーンとケルトの関係は、大正時代より論じられてきたが、そこで焦点となったのはアイルランドとの関係のみであり、他の地域に関しては等閑視されてきたというのが実情である。しかし本調査の結果、ハーンとアイルランドとの結びつきは、実際には文献的な観点からはほとんど確認できず、ハーンの民俗学的関心の大半は、ニューオリンズで出会ったブルターニュを中心とするフランス民俗学の書物に起源を持つことが明らかになった。

この成果は平成 28 年 2 月に富山大学で行われた国際シンポジウム「ラフカディオ・ハーンとフランス」において、「ラフカディオ・ハーンとブルターニュ」と題して発表した。ハーンとブルターニュ民俗学との関連性は、従来のハーン研究においてはまったく未開拓の分野であり、今後も研究を継続していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

梁川英俊, ラフカディオ・ハーンとブルターニュ, 『ヘルン研究』創刊号, 富山大学ヘルン(小泉八雲)研究会, 頁 83~94, 2016 年 3 月、査読無

梁川英俊, グウェンフランとは誰だったのか(2) 『バルザス=ブレイス』の冒頭の歌をめぐる, 『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』(Cultural Science Reports of Kaogoshima University)82 号, 頁 69~83, 2015 年 07 月、査読無

梁川英俊, グウェンフランとは誰だったのか(1) 『バルザス=ブレイス』の冒頭の歌をめぐる, 『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』(Cultural Science Reports of Kaogoshima University)81 号, 頁 53~68), 2015 年 02 月、査読無

梁川英俊, 柳田國男と『海上の道』: 「海南

小記の旅」から 100 年、いま日韓でできること, 『比較民俗学』(比較民俗学会)52 号, 2013 年 12 月, 頁 11~20、査読有

〔学会発表〕(計 8 件)

梁川英俊, ラフカディオ・ハーンとブルターニュ, 国際会議, 2016 年 2 月, 富山大学(富山県・富山市)

梁川英俊, フランス・ブルターニュ地方の口承文化の継承 - DASTUM の挑戦, 奄美沖縄民間文芸学会, 国内会議, 2015 年 08 月, 黎明館講堂(鹿児島県・鹿児島市)

梁川英俊, カンプリアのバルドからガリアのバルドへ - 海峡を越える<ケルト>, 日本ケルト学会九州研究会, その他, 2015 年 06 月, 西南学院大学(福岡県・福岡市)

梁川英俊, 夢想された<ケルト共同体>ラ・ヴィルマルケ生誕 200 年に際して, 日本ケルト学会九州研究会, その他, 2015 年 03 月, 西南学院大学(福岡県・福岡市)

梁川英俊, 5 世紀のブルターニュのバルドは実在したか? - 『バルザス=ブレイス』の「グウェンフランの予言」をめぐる, 日本ケルト学会東京研究会, その他, 2015 年 01 月, 慶応義塾大学(神奈川県・横浜市)

梁川英俊, 「グウェンフランの予言」について - 『バルザス=ブレイス』の冒頭の歌が語るもの, 日本ケルト学会, 国内会議, 2014 年 10 月, 宮城学院女子大学(宮城県・仙台市)

梁川英俊, An Introduction to Amami Folk Songs, 東亞細亞島嶼海洋文化 FORUM (East Asian Island and Ocean Forum, EAIOF), 国際会議, 2013 年 11 月, 鹿児島大学(鹿児島県・鹿児島市)

梁川英俊, 柳田國男と『海上の道』: 「海南小記の旅」から 100 年、いま日韓でできること, 比較民俗学会, 国際会議, 2013 年 06 月, 鹿児島大学(鹿児島県・鹿児島市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梁川英俊 (Hidetoshi YANAGAWA)

法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：20210289

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：